

アントレプレナーシップ教育プログラムにおけるPBL アクティベーションモデル：自己理解を起点とする 集団的意味形成プロセスとして

高橋, 浩一

<https://hdl.handle.net/2324/4496116>

出版情報：Kyushu University, 2021, 博士（感性学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

氏名	高橋 浩一 (たかはし こういち)					
論文名	アントレプレナーシップ教育プログラムにおける PBL アクティベーションモデル ー自己理解を起点とする集団的意味形成プロセスとしてー					
論文調査委員	主査	九州大学	教授	清須美	匡洋	
	副査	九州大学	教授	南	博文	
	副査	九州大学	准教授	田村	良一	

論文審査の結果の要旨

本申請論文は、アントレプレナーシップ教育プログラムにおいて、著者が大学教育の現場で長年実践してきた教育の基礎理論および方法論をユーザー感性学における学際融合の研究視座から、現象学と経営学における暗黙知の理論(SECI モデル)を背景とし、感性工学の視点から新たな PBL プログラム(PBL アクティベーションプログラム)として捉え直したものであり、これらの問題は未だ過去の研究においては解明されていない点で新たな領野を拓く研究である。本論文は自己認識を起点とする集団的意味形成プロセスに着目し、独自モデル(VIA モデル)を開発したことが大きな研究成果であり、今後の研究に示唆を与えるものである。

具体的には、先行研究の概要整理において、著者は日本のアントレプレナーシップ教育における現状を踏まえ、「起業態度」と「起業行動」に基づき、知識、スキル重視型から起業意思醸成を前提とする自己理解と PBL 活動のアクティベーションとしての集団的意味形成過程に着目し、現象学的視点からのセルフウエアネスにより、新たなセンスメイキングプロセスとして VIA モデルを提案している。さらに、大学におけるアントレプレナー教育プログラムでの PBL アクティベーションの実施を行い、プログラム実施の前後での参加者のセルフウエアネスと集団的な意味形成過程を共起ネットワーク分析の手法を用いて本モデルの妥当性を検証している。上記の結果により、従来あまり重視されていなかったテンポラリーな感性的価値観を起業意思の源泉として抽出可能な学際統合的アプローチにより、自己の間主観性と集主観性、さらには集団的意味形成の確認により価値観の正当化(「今現在、好ましいと感じるようになる」意識変化)が生じるという意味形成プロセスが実行化するという結果を得た。

本研究成果はアントレプレナーシップ教育プログラムに関し参加者の自己理解及び集団的意味形成を確認し、VIA モデルが起業態度醸成の前段階として PBL アクティベーションモデルとして機能することを実証化可能な研究パラダイムとして提示し、新たな知見を得た。よって、ユーザー感性学の新たな研究モデルとして非常に有意義な研究で価値ある業績と認められる。

予備調査委員会では、本研究で用いられた理論用語の背景や統計的手法の詳細など、様々な立場からの質疑があったが、高橋氏本人による的確な解答と修正があった。

以上のことから、学位審査の論文として受理に値すると判断された。

最終試験

この論文について、論文調査委員会は、令和3年8月16日(月)15時から、高橋 浩一氏及

び論文調査委員により、公開による論文の調査及び最終試験を実施した。

論文内容について、高橋 浩一氏は論文調査委員（全員）の質問に的確にかつ明確な回答を行い、また、口頭又は筆答により行われた関連の授業科目等に関する調査についても、論文調査委員を満足させる回答を行ったことから、論文調査委員会は最終試験を合格と認定した。

以上のことから、論文調査委員会は、高橋 浩一氏が博士（感性学）の学位を授与されるのに相応しいと判断した。